

海外アカデミック・ディスカッション	
イングランド中世シトー会の写本と修道院建築	
馬場 幸栄	比較社会文化学専攻
期間	2008年8月28日～2009年9月12日
場所	イングランド
研究プログラム名	International Study Group of the Christian Manuscripts
施設	オックスフォード大学

内容報告

『修練者の鏡』*Speculum Novitii*はイングランドのシトー修道士ソーリーのスティーヴン（1252年没）によって執筆されたと考えられている修練者たちのための生活指導書である。修練者とは修道者となるための修練期間にある者のことで、正式な修道会のメンバーではないが、短期間に驚異的な拡大を遂げたシトー会の人員獲得成功の背景を理解するために、また、修道院の外の人間がどのような過程を経て修道院の中の人間へと身分的変容を遂げたのかを明らかにするために、修練者研究は重要かつ不可欠なものであり、修練者の実態に関する詳細な史料である『修練者の鏡』は極めて稀少な存在である。

博士論文では、この『修練者の鏡』を主な材料として、中世シトー会の修練者制度の実態とそれが当時のシトー会および中世社会におよぼした影響について論じることを計画している。しかし、報告者によるこれまでの調査で、『修練者の鏡』の著者に関する定説がくつがえされる可能性が出てきてしまった。著者が変われば、執筆の意図や作品の内容に対する解釈も変えなければならなくなる。そこで、本ディスカッションでは、近年の写本研究の成果によって再検証が必要となった『修練者の鏡』の著者について、英国の写本研究者・歴史研究者たちとともに議論を行った。

まず、報告者である馬場が、従来の定説であったソーリーのスティーヴンを著者とするエドモンド・ミッカーズの主張を批判しつつ、新たにレクシントンのスティーヴンを『修練者の鏡』の著者候補として考慮しなければならないと考える四つの理由を述べた。第一に、ミッカーズがソーリーのスティーヴンを

著者としている最大の根拠はソーリーのスティーヴンの著書である『三つの霊操』『聖母の喜びについての瞑想』で使用されている語彙やフレーズが『修練者の鏡』のそれと類似しているためであるが¹、中世の著作家たちは他の著作家たちの表現をしばしば借用したので、語彙やフレーズの類似性は著者を確定する証拠としては十全ではないこと。第二に、『修練者の鏡』の現存写本のひとつには著者名として「サヴィニー大修道院長S」という書き込みが見られるが、ソーリーのスティーヴンはサヴィニー大修道院長を務めていないこと。第三に、近年馬場とニール・マクリンの共同研究によって慶應義塾大学図書館で発見された『修練者の鏡』写本には、他の『修練者の鏡』写本にはみられない「告白のありかた」という章が存在しており、そこには「一般的な告白の方法については、ここでは触れずにおいておく。それは別の論考で十分に明白かつ効果的に扱われるからである。」という記述が見られ²（図1）、このことから、『修練者の鏡』の著者は告白についての論考を執筆していた可能性があるが、ソーリーのスティーヴンの著作としてそのような作品は未だ発見されていないこと。そして第四に、近年リチャード・シャープによって大英図書館所蔵の『告白の鏡』というシトー会写本には著者を示す書き込みが「スタンレー大修道院長スティーヴン」と解釈されたが（図2）、スタンレーで大修道院長を務めたスティーヴンという人物はレクシントンのスティーヴンしかおらず³、しかもこのレクシントンのスティーヴンはサヴィニー大修道院長を務めた経験があること。

この報告を受けて、『修練者の鏡』慶應写本を馬場と共同研究した経験をもつキリスト教史研究者、ニー

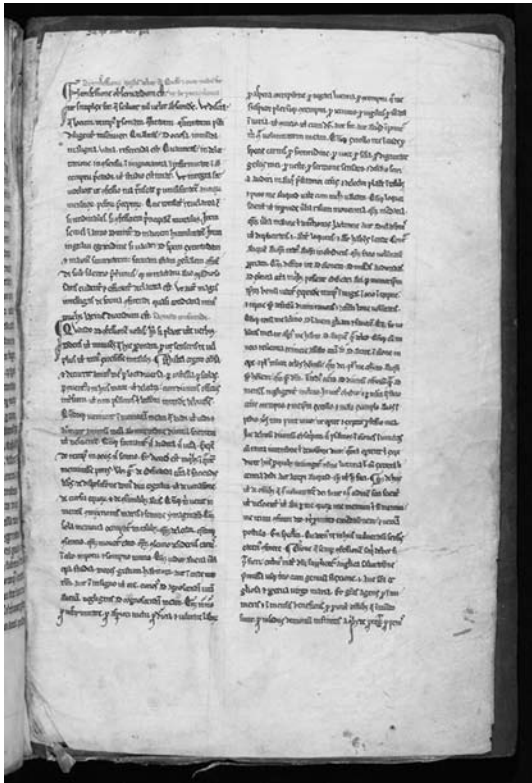


図1 新たに発見された章を含む『修練者の鏡』慶應写本 ©慶應義塾図書館

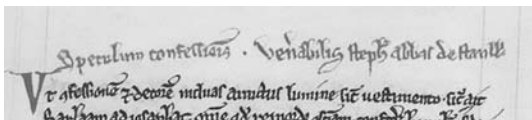


図2 レクシントンのスティーヴンとの関連性が注目される『告白の鏡』の書き込み ©大英図書館

ル・マクリン博士からは、現時点においてはレクシントンのスティーヴン説を支持するという意見と、「告白のありかた」という章にみられる「毎日の告白の方法については、あなたがよりよく理解するように、私はここで少しだけラテン語で述べておこう。」という記述において、あえて「ラテン語で」と記されていることもまた著者を特定する材料となりうるのではないか、という提案がなされた。

また、『告白の鏡』大英図書館写本の書き込みを解読したイングランド中世写本研究の権威、リチャード・シャープ博士からは、ソーリーのスティーヴンを著者とするミッカーズの主張は確かに論理的脆弱さが否めず、レクシントンのスティーヴンを著者とする説

に概ね賛同する旨の意見と、『告白の鏡』の内容が『修練者の鏡』の著者が執筆したのものとして相応しいものであるか否かについて質問がなされた。

ディスカッションの結論としては、写本研究における近年の発見にもとづいて馬場が提示したレクシントンのスティーヴンを『修練者の鏡』の著者候補とする説は、概ね研究者たちから肯定的に受け入れられるものであることがわかった。しかし、シャープ博士の指摘にあったように『告白の鏡』はまだ本格的研究が始まっていないので、今後の博士論文執筆計画には『告白の鏡』の本文翻刻および著者に関する研究を含めることとした。また、ディスカッションとあわせて、『修練者の鏡』にみられる修練者たちの生活に関する記述が、実際のシトー会修道院建築の構造と矛盾しないものであることを確認するために、イングランドにおけるシトー会の拠点のひとつであるファウンテンズ大修道院跡の現地調査も行った(図3、4)。



図3 最盛期に約150人を収容したといわれるファウンテンズ大修道院 著者撮影



図4 修練者たちが罪を告白し、ときには告発もされた集会所跡 著者撮影

なお、本ディスカッションの成果として、「中世シトー会の修練者生活指導書—『修練者の鏡』試訳—」という論文を『お茶の水史学』52号に掲載する予定である。

註

- 1 Edmond Mikkers, "Un «*Speculum Novitii*» inédit d'Etienne de Salley", *Collectanea Cisterciensia*, 1946, 17-68.
- 2 Yuki Baba, Neil McLynn, "On Confession: A Cistercian Treatise in Keio University Library", *Codices Keionensis: Essays on Western Manuscripts and Early Printed Books in Keio University Library*, ed. by Takami Matsuda, Keio University Press, 2005, 31-68.
- 3 Richard Sharpe, "A Handlist of The Latin Writers of Great Britain and Ireland before 1540, with Additions and Corrections", *Publications of The Journal of Medieval Latin*, Brepols, 2001, 632-634.

ばば ゆきえ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
baabil@yahoo.co.jp

【指導教員のコメント】

現在博士論文執筆中の馬場幸栄さんが行っている研究は、12世紀から14世紀におけるシトー会修道院が作成した写本をつきとめ史料学的に検討し、その上でそれら写本が修道院運営や当時の社会のなかで担った役割を明らかにしようというものです。とりわけ、馬場さんらとその新発見に関わった『修練者の鏡』という写本は、13世紀に急成長した修道会であるシトー会修道院が、リクルートした新人を教育する目的で作られたものですが、それがいったい誰によって書かれたものなのかという疑問が、新発見の写本によって提示されるに至りました。そこで馬場さんは、本大学院教育支援プログラムによる助成を受けて、それに答えるべく、イギリスの史料学専門家やシトー会研究者とディスカッションを行ったわけです。第一線の研究者とのディスカッションや史料検討の結果、馬場さんの推論におおむね賛同が見られたということは、今後馬場さんの博士論文を執筆する上で、大きな土台が確立したとすることが出来ます。また最先端の研究者との意見交換は今後も大きな財産となってゆくものと考えられます。史料学の分野では、日本とイギリスとを問わず、また史料の違いを問わず、既に十分な国際化が進んでいますが、日本の研究者が、欧米の史料へ積極的に発言し同時に日本独自の史料形態についても広く海外に発信してゆくことが今まさに求められています。馬場さんによる今回の海外アカデミック・ディスカッションは、このような動きに大きく寄与するものといえましょう。このような試みが今後も続けられることを強く希望します。

(人間文化創成科学研究科 准教授 新井 由紀夫)